

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

2012 年度第 2 回研究会報告書

東アジア・東南アジア大陸における文化圏の形成と他文化圏との接触—タイ文化圏を中心として—

平成 24 年度第 2 回研究会

日時： 2012 年 6 月 23 日（土）午後 1 時 00 分から 6 時 30 分

場所： 東京外国語大学 AA 研棟マルチメディア会議室（304）

報告：

1. 市原慎太郎（明治大学文学研究科博士後期課程）

「清代康熙年間(1661-1722)の貴州省周辺における対非漢人政策について」

2. 伴 真一郎（大谷大学真宗総合研究所研究協力員）

「ダライラマ政権成立前後のチベットーモンゴル交流におけるアムド・チベット人領主の重要性について - 西寧シナ領主によるモンゴルへのチベット仏教伝播とその背景 - 」

報告の要旨

中華世界、チベット世界及びタイ文化圏では、土司制度という中国の間接統治システムが実施されていた。これは、中国王朝が周辺地域、特に、中国西南部、チベット世界やタイ文化圏の非漢族のリーダーに対して中国式の官職を授与して、その領地内の統治権を認可した制度でした。これまで中国王朝が非漢族を中国王朝の統治体制に組み入れて間接統治する仕組みとして説明されたことが多い制度だったが、この度の研究会では二人の発表者に、非漢族が土司制度を、自己政権を強化する手段としている視点から発表を行った。（唐立）

1. 市原慎太郎「清代康熙年間(1661-1722)の貴州省周辺における対非漢人政策について」

清代における土司制度(非漢人の現地政権に形式的官位を付与し、代わりに貢納・軍役を受け取る制度)の画期は、雍正年間(1723-35)とされている。この時期に、雲貴高原各所の土司は多く武力を伴う解体(改土帰流)を被り細分化された。多くの研究はこの雍正年間に注視し、それに先立つ康熙年間(1661-1722)の非漢人政策に関してはあまり注目されていない。

貴州省における雍正年間の非漢人統治政策には、貴州西南部の広順府の長寨などに対する軍事拠点の建設などの軍事動員が知られているが、淵源となった土司の付近の漢人らへの掠奪行為や「川販」と呼称された人身売買業者の活動は康熙 57 年ごろから奏摺資料に見られること、また、改土帰流については康熙年間を通じ土司の廃止が継続されていることなど、雍正年間と康熙年間には政治的な連続性をうかがうことが出来る。政治的には、奏摺や『(乾隆)貴州通志』などの地方志からは次のことが確認できる。清朝が貴州省に対し直接統治を始めた康熙 20 年代にはすでに貴州省における土司相互の対立や掠奪が顕在化しており、地方官らより皇帝にしばしば報告が上っていた。また、土司の掠奪行為に対し、清朝は康熙年間を通じて数度の軍事的動員による鎮圧を試みている。しかし、康熙帝は積極的に土司を排除し、漢人官僚による直接統治をすることには消極的であったとみられる。

社会的には、康熙年間は隣接する湖広地域などからの移民を受け入れており、開発が進展した。康熙 40 年代には貴州省東部の土司地域において漢人が優勢となりつつあることが史料上から推察できる。また、各所の土司地域に商業目的で入る漢人がいたことも確認できる。康熙 52 年にはこの土司地域で活動する漢人の一部が土司の不法行為の原因として地方官に認識され、漢奸と呼称されている。このような漢人の商業活動のうち誘拐による人身売買が注目され、弾圧の対象となるのは雍正年間の事となるが、すでにその端緒が康熙年間から見られる。

康熙年間の貴州社会は土司間の対立や掠奪行為が問題として認識されてきたが、清朝の対応は逐次出兵して鎮圧する程度に留まり、抜本的なものには至らなかった。また、土司管轄下への漢人の進入が引き起こす問題についても認識はしていたものの、解決には至っていない。これらの政治的諸問題は雍正年間に持ち越されたのである。(市原慎太郎)

2. 「ダライラマ政権成立前後のチベットーモンゴル交流におけるアムド・チベット人領主の重要性について - 西寧シナ領主によるモンゴルへのチベット仏教伝播とその背景 -」

本発表ではチベット語史料、漢語史料、モンゴル語史料を用いることによって、従来では重要と認められていなかったアムド・チベット人のシナ領主が、中華王朝との関係によって培った勢力を背景として、ゲルク派とモンゴルが関係を形成していく過程において両者を仲介する役割を果たしたことを明らかにした。

16 世紀末期より本格的にチベット仏教が伝播したモンゴルではチベット語仏教経典の輸入と翻訳が盛んに行なわれた。その際にモンゴルはシナ領主の経営する仏教寺院を通じて中央チベットからチベット語テンギユル大蔵経を入手しようとした。

それを可能にした歴史的背景はアムドを巡る明朝とモンゴルの勢力争いである。明朝がアムド・チベット人領主を軍事力として統制化に置こうとしたが、モンゴルは、チ

ベット人の精神的な拠り所であった仏教寺院に対して、モンゴル人と関係の深い僧侶が座主となることによって、あるいは布施を行なうことによって、自己の影響力を及ぼそうとしたのである。こうした関係が背景となってモンゴルがシナ領主からチベット語経典を入手しようとしたと考えられる。

またシナ領主が中央チベットより大蔵経を入手できた背景は、ゲルク派の中央チベットからアムドへの教線拡大においてシナ領主が重要な役割を果たしたことである。16世紀の末期からシナ領主はチベットとモンゴルを結ぶ寺院クンブム寺の施主として活動した。それにより中央チベットとシナ領主の関係は密接になり、大蔵経がもたらされたと考えられる。そして中央チベットのゲルク派にとっては独自の勢力圏を持つシナ領主と結びつくことによって、アムドに派遣した僧侶の安全を確保できる意味があった。その勢力圏は明朝によるアムドのチベット仏教に対する保護政策によって形成されたものであった。

万暦期(1573-1620)において明朝、チベット、モンゴルの間にチベット仏教を中心とした関係が形成されていった。シナ領主はその三者の境界にあって、チベット仏教を媒介とした結びつきを強める役割を果たしたといえる。ここからシナ領主というローカルな勢力が、仏教という世界宗教を媒介にして、グローバルな国際関係における自らの位置を高めていったことがいえる。(伴 真一郎)

各発表に対して活発な質疑応答がありました。(唐立)